

園田茂人編著

『現代中国の階層変動』

中央大学出版部 2001年 xiv+192+6ページ

チン リッ ムウ
陳 立 行

はじめに

改革・開放以降20年の間、市場経済への転換に伴い、中国社会において急速な変化が生じた。中国経済はグローバル経済システムと緊密につながり、世界経済の一部と化するほど開放が進んだ。この転換期においては資本と物だけではなく、情報や人の移動も国境や地域を超えて頻繁に行われている。経済体制の改革の進行に伴い、所有形式が多様化され、経済活動が空前の規模で活発となり、経済の高度成長が実現した。その結果、所得の格差がますます広がり、従来の計画経済体制のもとで構築された均等の所得体制と国家の主人公である労働者の平等意識が薄れてゆき、95%の人民と5%の敵という対立的な階級構造と階級意識が完全に崩れ、新たな階層分化と階層意識の形成が不可避なこととなった。

しかし、中国では市場経済への転換が積極的に進む反面、政治とイデオロギーの領域においては社会主義的理念を堅く守っている。そのため、一元的政治体制と多元的経済体制が並存している現象が生じた。これは転換期における新たな階層の分化と階層帰属意識の分析に対して理論的困難をもたらした。にもかかわらず、多くの学者は新たな階層の分化と階層意識の形成に焦点をおき、変化しつつある中国の社会構造を把握しようと努力している。

本書の編著者たちは台頭する中産階級に焦点をおき、気力を入れ、階層再編が活発に進行している大都会で現地調査を行った。その結果に基づいて、社会的移動と階層帰属意識などの現状を把握するうえ

で中間層の形成とその社会構造変動との関連について実証的分析を行った。本書は激変している中国社会変動の解明においては大きな意味を持ち、中国の大都会の社会像を掴むには最新の研究結果となっている。

I 構成と内容

本書は次のように構成されている。

第I部 階層研究の現在

第1章 中国の階層研究——今後の比較研究のために——（園田茂人）

第II部 台頭する中間層

第2章 新興自営業層に見られる中国的特質——天津市のケースから——（潘允康）

第3章 白領（ホワイトカラー）の形成とそのアイデンティティ——上海市のケースから——（呂大樂）

第4章 中間層の台頭が示す新たな国家・社会関係（園田茂人）

第III部 階層移動と階層意識

第5章 天津市民の社会移動と意識構造（嚴善平）

第6章 重慶市の階層ヒエラルキーと社会移動（俞萍）

第7章 上海市民の社会移動と階層意識（仇立平）

第8章 広州市民の階層帰属意識（鄭晨）

第I部では、台湾、香港を含む階層にかかわる既存研究を踏まえ、アジアNIEsの発展を支える中産階級研究の諸仮説が今後の中国本土との階層に関する比較研究に対して重要な問題提起をしていると意味付けている。と同時に、社会主義市場経済においては政治資源、経済資源、関係資源の占有と活用が階層再編にとってともに大きな意味を持っていると認識しなければならないと指摘している。ところが、中国本土の中産階級の研究にあたっては、既存理論の説得力が不十分である。さらに、資産階級と労働者階級の間に置かれ、市民社会形成の重要な原動力

としての中産階級の研究には新たな理論的展開が必要とされる。

第II部では、自営業者とホワイトカラーを対象とし、台頭する中間層の現状と中国の市民社会の形成に対する中間層の意味を考察している。

第2章では、天津の自営業者に対する調査結果に基づいて、自営業者においては私営企業家と同様に資本額と経済所得が急速に成長しているものの、自己イメージには心理的なねじれが見られると報告している。自営業者は自分の生活水準が他の層よりも向上し、経済的に顕著な中流意識を持っている一方、他者と平等に競争する機会が与えられておらず、「収入」、「職業」、「学歴」、「地域」、「出身」などの点について、社会的不公平が根強く残っていると感じている。これについては従来の「国営」企業に対する崇拜から生まれた社会的偏見の残存と一部官僚の権力乱用と腐敗が主な原因だと指摘している。

第3章では、改革・開放の最先端に立ち、世界経済と最も緊密につながっている上海市で実施されたインタビュー調査の結果を用いて、中国の「白領」、ホワイトカラーの形成と彼らのアイデンティティについて論じている。筆者は管理職、専門職、行政職に就く50人のケースを総括し、多元的経済体制は人々に多様なキャリア・パスを提供し、また、「政治資本」の弱化と新興の労働市場の活発化は中国のホワイトカラーの形成を可能にしたと述べている。中国のホワイトカラーは収入、教育水準、労働の性質、生活スタイルなどでは他の社会のホワイトカラーと共通な特質を持っているが、多くの人がホワイトカラーとしてのアイデンティティを持っておらず、新興の中産階級の一員としての階級意識がまだ弱い。その重要な理由のひとつは、同じホワイトカラーでも国家部門と非国家部門との違いによる社会的格差が存在しているからだと指摘している。

第4章では、中国における市民社会の形成の可能性を意識して、中間層を考察している。筆者は自営業を旧中間層、ホワイトカラーを新中間層と捉え、さらに生産手段の有無と国家からの自律性の強弱との2つの軸を設け、自営業者、国有企業で働くホワイトカラー、外資系企業で働くホワイトカラーの3

つの類型に分け、彼らの属性と政治的態度を分析した。3つの類型では改革・開放の恩恵を受けることは共通しているが、国家への従属と権力へのアクセス距離の相違によって、異なる政治理念と政治意識が見られる。現段階では中間層は国家との間には「共生関係」、言い換えれば、経済資源と政治資源との間の「取引」関係に左右されやすく、西洋型の市民社会を形成する中堅の階級としての自己認識はまだできないと結論付けている。

第III部では、市場経済が急速に進行している4つの大都会、上海、天津、広州、重慶で実施された調査データに基づいて、社会移動と階層帰属意識の分析を行っている。

第5章では、天津市を対象地域として統計モデルを作り上げ、それを用いて社会移動と地位達成の要因、階層帰属意識について検証している。他の社会と異なっており、中国独特な制度上の制限は、個人の努力よりも世代間の職業移動に影響を与えることを踏まえ、「家族背景（親の学歴、職業、15歳時の居住地）→学校教育（学歴）→就職後の努力具合（転職歴、政治的身分）→現在の地位（給与、職業）」という中国における地位達成モデルを作り上げた。中国において、給与に対しては政治的身分（共産党員など）が大きな相関を持っているが、職業に対しては性別の相関の差がほとんど見られないという発見がなかなか意味深く述べられている。また階層帰属意識に対して、学歴、勤務先の規模、月収、政治的身分などの変数よりも、父親の学歴が高いほど統計の有意性を持つことを検証している。

第6章では、重慶市で実施された調査に基づき、階層ヒエラルキーの変容と社会移動を分析している。職業から見た現在の階層ヒエラルキーには計画経済時代の「幹部→労働者→農民」と大きな差は見られないが、勤務先による階層ヒエラルキーは大きく変容した。外資系企業と個人経営が国家機関に次いで上位2番目のランクに上昇した一方、国有企業が上位2番目のランクから下位2番目に下降した。世代間の社会移動については政府行政機関における「世襲」問題が深刻となっていると指摘している。

第7章では上海市のデータを用いて、世代間の上

昇移動は社会構造の変動によってもたらされた現象だと指摘している。ところが法律の不備によって、権力と経済利益の交換が容易にできるため、生産手段に対する占有権、支配権、管理権、使用権の大小、および行政官僚の経済活動に対する権力の大小により、職業が序列化されることは無視できない。社会移動については、一般的に農村部から都市への移動が構造変化によることと捉えられるが、存続している戸籍制度のもとでは都市戸籍の取得自体が社会的地位の上昇を意味していると述べている。

第8章では広州市のデータから、市民の階層帰属意識では約50%の人が「中」に属する意識を持っていることを報告している。さらに、15の変数に対する多変量解析の結果は権力、収入、学歴、財産、社会的威信などの説明力が弱く、それに対して、「本人十五歳時における家族の階層帰属評価」が最も解釈力が強いということが見受けられた。階層形成の要因については、階層帰属意識によって異なっている。帰属階層が低いほど「権力」と「家庭背景」に、帰属階層が高いほど「教育」に原因を求める傾向が窺われる。

II 若干のコメント

以上の内容について、次の2点についてコメントを行う。第1点は転換期における政治資本と経済資本に着目して階層変化を把握することを積極的に評価する点である。第2点は階層帰属意識の分析に際しての変数モデルの不十分性を指摘したいと思う。

本書は7人の筆者によって書かれたものの、政治資本と経済資本という2つの概念に着目して階層変化を把握することが共通に見られる。これは政治権力が経済活動に大きな影響力を持つ転換期における中国の階層変動の分析にあたっては適切な着眼点と言える。実は改革・開放までの計画経済のもとで政治資本は階級と階級意識の形成に最も重要な要素となっていた。当時、経済収入の格差が厳しく制限されたが、政治資本は、機会、社会威信、より質の高い生活の獲得を可能にした。この政治資本が幹部、共産党員、軍人、大手国営企業の労働者などの特定

の階級に属し、彼らの階級と階級意識の形成に大きな影響を与えた。しかし、特定の階級に属した政治資本は、市場経済への転換に伴い、価値がどんどんなくなるため、それに属した人々にとっては経済収入低下による生活の変化よりも階層意識の逸脱感が強くなるのが大きいと考えられる。市場経済におけるいわゆる政治資本とは、経済収入と交換できる特定な権力だけとなった。ここで、政治資本の内容変化は従来の階層構造の崩壊と新たな階層構造の構築とつながっている。これは中国に限らず、計画経済体制から市場経済へ転換する社会構造の変化に共通した現象だと言っても過言ではない。この意味で、本書が政治資本と経済資本に着目し、両者の転化を重要な変数にして転換期の階層変化を把握することは理論的に大きな意味を持っていると言えよう。

また、中国社会においては階層と階層意識の形成に対して、政治資本の多少だけではなく、国家権力との距離も重要な変数となっている。本書では中間層の分析に、生産手段の有無と国家権力からの自律性という2つの軸を導入して、中間層を類型化しており、これは大きな意義を持つ。ホワイトカラーは国家権力との距離が近いほど「国家の代弁者として振る舞い」、むしろ支配階級の帰属意識を生みやすいであろう。この分類の方法を用いれば、国家権力と緊密にかかわるホワイトカラーの中間層に占める割合の変化を掴むことが可能となる。それは中間層の自律性、さらに、中産階級としての形成の可能性を示す指標としても考えられる。これは今後の中国市民社会の形成の可能性についても説得力を持つ。

第2点として、階層帰属意識の分析にかかわる変数モデルには不十分なところがある。本書では中国の4つの大都会を対象にし、社会移動と階層変動について各々の視角から分析したことによって、市場経済が進んでいる大都市の社会像を克明に描いている。しかし、階層帰属意識についての把握と分析では、これまでよく使われた学歴、勤務先の規模、月収、政治的身分などの変数を用いて説明しようという仮説がサポートされなかったことは残念と言わざるを得ない。筆者たちは「5年前の生活水準」や「父親の学歴」や「家族背景」などの通時態の要素

を変数として入れたが、変数モデルの構築の不十分さにより、各々の章ではデータの説明だけにとどまってしまった。評者は転換期の階層帰属意識を把握しようとするならば、変数モデルには共時態の変数を客観的事実に、通時態の変数を主観的意識にして、両者の相互作用から階層帰属意識を把握すれば、事実にとどまらず、理論的展開ができるのではないかと考えている。つまり、通時態の変数から社会に対する期待値が把握できる。一般的に、客観的社会事実と人々の社会に対する期待に左右された主観的認識との間には、ずれがあることは当然である。客観的に同様な資源を持っても、その人の期待値によってその階層に対する帰属意識が異なり、社会の公平さに対する認識も違ってくると言える。特に、転換期における急速な構造変化により、そのずれが普通の社会より遙かに大きいため、客観的社会事実と主観的認識との差の度合いを掴みながら、階層帰属意識を分析する変数モデルを作り上げれば、中国社会の特定研究に限らず、普遍的な社会移動と労働移動に伴う階層帰属意識の研究にも、もっと建設的な貢献になるのではないかと。

文献リスト

〈日本語文献〉

石田浩編 1998.『社会階層・移動の基礎分析と国際比較』1995年SSM調査研究会.

園田茂人 1998.『社会階層の構造変容——台頭するアジアの中間層——』天児慧編『アジアの21世紀——歴史的転換の位相——』紀伊国屋書店.

〈中国語文献〉

李培林主編 1995.『中国新時期階級階層報告』瀋陽 遼寧人民出版社.

梁曉声 1997.『中国社会各階級分析』北京 経済日報社.

〈英語文献〉

Nee, V. 1991. "Theory of Market Transition: From Redistribution to Market in State Socialism." *American Sociological Review* 54(4).

Lin, N. and Y. J. Bian 1991. "Getting Ahead in Urban China." *American Journal of Sociology* 97.

(日本福祉大学大学院情報・経営開発研究科教授)